

『ひょうご歴史研究室紀要』 発刊にあたって

平成二七年度四月に開室した「ひょうご歴史研究室」は、研究コーディネーターと事務スタッフがそれぞれ一名、あらたに配置され、足りないところは歴史博物館スタッフがサポートするという体制で進み始めました。何事もそうであるように、当初は足踏みしましたが、秋になって、とくに館蔵品の風土記レプリカの展示（一〇月九日～二月六日）が「歴史工房」のコーナーで実現することを通じて軌道に乗ってきたようです。博物館・研究室双方の思いやりと努力の賜だと感謝しています。

研究室の発足は、新聞各社に取り上げられるなど、かなり話題となりました。また平成二七年一月一日に、兵庫県教育委員会が発表した「平成27年度教育10大ニュース」の一つに選定されました。

研究室が注目されているのは、①播磨国風土記、②赤松氏・山城、③たたら製鉄という三つの研究テーマが、いずれも播磨の歴史を広域的に物語る重要テーマであるということに一つの要因があると思いますが、同時に、歴史博物館と考古博物館という二つの県立博物館が中心となり、そこに神戸大学・大手前大学・播磨学研究所・兵庫県政資料館などの教員や研究員、さらに県内市町の文化財担当者が加わるといふネットワークの広がりに大きな要因があると思います。

また歴史博物館にとっても、研究室の開室には大きな意味があります。『兵庫県史』という大きな遺産を受け、みずから県内各地に出かけることで博物館を育て上げてきた草創期と比べると、三〇年を経過した現在、博物館としての実績には揺るぎないものがある反面、学芸員は世代交代期に入り、地域の側には少子化・高齢化が急速に進展するなど転換期に入っています。それに加え兵庫県の場合、摂津・播磨・但馬・丹波・淡路の旧五ヶ国からなるという大きな特徴を持っており、昨春秋に策定された県の地域創生戦略では「多様性と連携」が基本的な方針として謳われています。博物館としても、あらためて兵庫県という多様性に満ちた地域にアプローチす

ることが重要な課題であると確信します。

紀要創刊号では昨年、編さん一三〇〇年を迎えた「播磨国風土記」を取り上げています。他の風土記が冊子本として残されているのに対し、卷子本（巻物）で残されているのが「播磨国風土記」の一大特徴ですが、長大なレプリカの展示は見応えがありました。実際に、のべ六〇日間近くの展示期間中に観覧された人々のうち、「風土記展見学のために初めて県立歴史博物館を訪れた人」の比率は四二％で、秋の特別展「北前船」と肩を並べていました。

個人的には岡平保という幕末の神官・文人の存在にも強い印象を受けました。地誌を編纂するのは国の仕事ですが、その地誌を、千年の歳月を超えて読み・伝えようとするのは後世の人々の熱意と営為によるほかありません。博物館という存在も、ひょうご歴史研究室の任務も、それに相通じるものがあると思います。

平成二八年三月

兵庫県立歴史博物館長・ひょうご歴史研究室長

藪田 貫